

日本若手精神科医の会を通して見る日本精神神経学会の活動

| 高橋 英彦 Hidehiko Takahashi

今回、当学会の国際委員会の委員長や担当理事として、当学会の活動を振り返ってみたいと思います。言うまでもなく、当学会は、日本における精神医学の学術的・臨床的發展を牽引する中核的組織であり、多岐にわたる重要なミッションがありますが、精神科医の育成や教育、国際連携なども含まれます。このミッションは、日本若手精神科医の会のミッションと通じるところがあり、逆にいうと、当学会のミッションのためには、日本若手精神科医の会の協力が不可欠であります。著者自身、日本若手精神科医の会の一期生でありましたが、今では理事として日本若手精神科医の会の活動を支援・見守るなかで、当学会全体の方向性や価値観がこの会のなかに反映されていることを強く実感しています。

国際的な活動もさまざまなものがありますが、最初に学術総会の際の「Fellowship Award Symposium」について、紹介したいと思います。従来、「Fellowship Award Symposium」では、各国から選出されたフェローと一緒に日本からもシンポジストを選出し、その日本人には「若手国際シンポジウム発表賞」を授与しておりました。しかし、実際の活動内容は、海外のフェローも日本人のシンポジストも同じなので、第121回学術総会より「Fellowship Award Symposium」に統合し、わかりやすくしました。「Fellowship Award Symposium」ではテーマ1と2があり、テーマ1は、総論的なテーマ、テーマ2は個別の症例について、各国の医療事情に即して紹介、意見交換を行うものであります。選出された日本人のフェローは当然として、学術総会以降も持続する各国のフェローとのネットワークづくりや国際共同研究にも、日本若手精神科医の会のメンバーが精力的に活動をしてくださり、頼もしい存在です。もちろん、若手精神科医の会に入会しなくても、国際委員会に関するイベント、シンポジウムには参加できますので、気軽に応募や会場に足を運んでいただければと思います。

国際委員会の活動として、米国、英国、豪州、韓国、台

湾の当学会のカウンターパートの学会との交流があります。日本での学術総会に海外の学会の代表の方に参加いただく活動と反対にアメリカ精神医学会（APA）や王立オーストラリア・ニュージーランド精神医学会（RANZCP）などに、日本の代表を派遣する活動があります。著者も昨年のニューヨークで開催されたAPAにシンポジストとして参加し、さらに学会の執行部とも意見交換してきました。各国のシニアや若手との交流を通じて感じたのは、各国にも若手精神科医の会に相当する組織や活動はあるものの、日本ほど、実体が明確であり、「ボトムアップ型」の活動が目に見えるという印象はありませんでした。当学会はそれにとどまらず、さらに、若手ならではの視点が学会の活動や委員会活動にも反映されるよう、委員会のメンバーだけでなく特任理事という形で若手の意見をとり入れる取り組みをはじめました。ここでも日本若手精神科医の会のメンバーがかかわっています。また、日本若手精神科医の会は国際委員会が関連する活動である世界精神医学会の機関紙の『World Psychiatry』の翻訳活動にも携わり、その成果は当学会のホームページでご覧いただけます。著者も当学会の機関紙の『Psychiatry and Clinical Neurosciences』の編集長の一人として、『World Psychiatry』の様子を日本語で概観できるのは助かっています。さらに、日本若手精神科医の会は全国各地の医師をつなぐハブとしても機能しており、都市部と地方との診療環境の違いや専門性を超えた交流促進にも寄与しています。これも日本の若手精神科医の会が世界的にみてもアクティブでユニークな存在の証といえます。理事として、日本若手精神科医の会がここまで主体性をもち、学会と協働しながら多彩な活動を展開していることは、まさに当学会の健全性と未来志向を象徴していると考えています。若手の柔軟な発想や行動力を尊重し、今後も、「若手が育つ学会」「若手を変える学会」として、次世代の精神医療を担う人材が安心して飛躍できる場を築いていくことに微力ながら貢献できたら幸いです。